



図1. 枯れたコナラの木



図2. ファイルをトラップとして設置

コナラを枯らすのは、甲虫のナガキクイムシ科の一種のカシノナガキクイムシのしわざであることは以前より知ってはいたが、静岡市の付近に分布を拡げているということは知らなかった。

カシノナガキクイムシの県内の発生現状と本種の特性ならびにトラップの設置法を御教示くださった県森林・林業センターの加藤 徹さんにお礼申し上げます。

カシノナガキクイムシは、県内では日本海側から岐阜・愛知を経て浜松市に2010年に侵入が確認され、その拡散が懸念されていた。「松枯れ」と同じように、木を枯らす原因が伝搬されており、いずれも昆虫が「運び屋」となっているのである。いわゆる「ナラ枯れ」はカシノナガキクイムシが運ぶラファエラ菌によって起こるそうで、最初にオスが幹に侵入して、次いでオスに魅かれたメスが坑道へと入り、菌が材に伝搬されるという興味深い行動にもとづいている。

昨年（2018年）の夏、NPO自然史博ネットワーク・スタッフの片井信之さんの協力を得て、博物館の裏山にトラップを設置してみた。トラップは事務用のプラスチック製のA4サイズのファイルそのもので、林内のコナラ、モミ、アカメガシワの幹にステップラーで留めた。降雨によって水があふれ、せっかく入った個体がこぼれ落ちるという思わぬアクシデントがあったが、コナラにつけたトラップでのカシノナガキクイムシの捕獲数が、モミ、アカメガシワの場合より圧倒的にまさっていた。やはりコナラの幹により多くの個体が集まってくることが示された。

さいわい、カシノナガキクイムシによるコナラの被害は昨年（2018年）の時点で、県西部から中西部にかけての低地や伊豆半島の南部では、すでに集団的枯死から終息の傾向にあることが示されている。静岡の主要な林産物であるシイタケの原木栽培のためのほだぎにはクヌギとともにコナラが使用されている。これで、なんとか心配だけで終わってくれるだろうか。



図3. トラップに捕獲されたカシノナガキクイムシの成虫